

目的 従来和服製作におけるゆきの計測には、一般に、上肢 90° 側拳の姿勢で脊中心より尺骨頭までの長さが計られている。しかし、着装時において上肢の運動特に下垂動作時に手首が表出して着装美をそこねていることが多く見られる。

そこで私達は、着装中の着物の袖口が、手首付近と程良い美しさを保持しながら上肢運動に伴う身体上のゆき丈変化とカバーし得るゆきの測定方法をきぐることを目的として、ゆき計測の異なる実験衣を用い、体型別にゆきの適合性を着用実験により比較検討した。

方法 年齢18才～20才の女子学生80名の中からローレル示数により、瘦せ5名、標準5名、肥満5名、計15名を選び被験者とした。

ゆきは、①上肢下垂② 30° 側拳③ 60° 側拳④ 90° 側拳の姿勢で計測し、その寸法に基づいて、綿100%浴衣地で単衣長着を製作した。

上肢運動として 45° 前方で①下垂② 45° 上拳③ 90° 上拳の動作を行い、尺骨頭と皮膚に接した袖口のずれ寸法をスチールメジャーで測定した。

結果 (1) 三元配置分散分析の結果、着物の要因が危険率1%、動作の要因が危険率5%で有意差が認められ、体型の要因は有意差が認められなかった。

(2) 尺骨頭より袖口のずれが $-2\text{cm} \sim +1\text{cm}$ と許容範囲として適合性を調べた結果、実験衣②、次いで③が体型に関係なく適合度が高く、①、④は適合度が低い。但し、①への適合度が標準、肥満では瘦せよりやや高い傾向が認められた。